

宮野 啓二 著

『南・北アメリカの比較史的研究—南・北アメリカ社会の相違の歴史的根源—』
御茶の水書房, 2013年

和田 光弘*

本書は、なぜ南北アメリカが歴史的に異なる道を歩んだのか、その「対照的な相違」の淵源を探ることを意図した非常にスケールの大きな労作である。構成は以下のごとく極めて体系的に組立てられており、南北アメリカを比較する第1部・全4章と、スペイン語文献も駆使しつつ、スペイン植民地について詳細に論じる第2部・全4章からなる。

序

第1部 南・北アメリカの比較史

第1章 南・北アメリカの比較経済史的考察—イギリス植民地とスペイン植民地—

第2章 アングロ・アメリカ植民地とラテン・アメリカ植民地の比較史

第3章 新大陸奴隷制の比較史的研究—E・D・ジェノヴィーズの所説を中心に—

第4章 フロンティアの比較史的研究—アメリカ合衆国, ラテン・アメリカ, 南アフリカ—

第2部 新大陸におけるスペインの植民地政策

第5章 アステカ社会におけるカルプリ共同体

第6章 ラテン・アメリカにおけるラティフンディオと原住民共同体—史的考察—

第7章 スペイン領アメリカにおける原住民の集住政策—メキシコを中心に—

第8章 新大陸におけるスペイン植民都市の歴史的特質

著者によれば、本書は「アメリカ史の研究から離れた後の論文」を編んだものとのことである。したがって、初期アメリカ史を学ぶ評者の浅学ゆえ——とりわけラテンアメリカ史について——正鵠を射た評を展開しうるかどうか、はなはだ心もとないが、内容を簡潔に紹介し、若干のコメントを付すことで、何とか評者としての責めを塞ぎたい。

著者はまず「序」で、本書の課題を考究するに至った道筋を、自身の経済史研究の歩みから説く。その説明は限られた紙幅ながら、戦後のアメリカ経済史研究の流れとも密接に重なり、単なる学説史を超えた貴重な証言となっている。そしてリオグランデを渡ってラテンアメリカ史に「足を踏み入れる決心をした」経緯が述べられる。さらに、本書の各章を構成する論文の初出情報を提示するとともに、各章（各論文）の内容を簡潔に記載して、読者にとって大変親切な作りとしている。

さて第1部・第1章では、南北アメリカ論に関する知の先達たちの説を詳細に検討することで、南北アメリカの比較史を理論的に概観し、全体の見取り図を提示する。俎上に載せるのは、まずはスミス、ヘーゲル、ウェーバーであり、彼らは総じて、進んだ西欧と遅れた南欧の文化の継承地として北米・中南米を捉えた。これに対して——とりわけウェーバーに対して——強い批判を加えたのが従属理論を提唱したフランクであり、さらにマリアテギ、サバーラ、ラン

*和田 光弘 (Mitsuhiro WADA) : 名古屋大学大学院文学研究科教授。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士 (文学)。『紫煙と帝国』名古屋大学出版会, 2000年; 『タバコが語る世界史』山川出版社, 2004年; 『記録と記憶のアメリカ』名古屋大学出版会, 2016年; 『歴史の場』(共編著) ミネルヴァ書房, 2010年; 『大学で学ぶアメリカ史』(編著) ミネルヴァ書房, 2014年, など。

ベール、ハーリング、ラング、ヘネシーなど、近年に至る多くの研究者たちの論考を渉猟し、検討を加えた上で、著者は南北アメリカへの移民の「人間類型」の違い——北米の「プロテスタント的植民者型」と中南米の「カトリック的征服者型」——を析出するとともに、植民者の定住形態の差異や、新大陸の自然的・社会的な客観的条件を考慮に入れた植民地類型論の精緻化の必要性を説く。また本章では1節を割いて(第6節)、新大陸奴隷制の比較史論についても考察を加えており、ヴァージニアとキューバを例にタンネンバウム説を歴史的に実証するクラインの2類型モデルを援用し、南北アメリカの奴隷制の相違を定式化している。そもそも歴史事象を類型化し、分類する作業は、ややもすると当時の社会の多様な実相を捨象してしまう危険性もなしとしないが、概してわかりやすいモデルを構築するためには、単純化のプロセスが不可欠であることは十分に首肯されよう。

続く第2章では、第1章を補完すべく、植民地類型論に焦点を定め、一層具体的な議論を重ねる。かかる分析視角は、「世界市場論的(世界システムの)アプローチ」をあえて避けて選択したものであることも明記される。イギリス植民地は、ニューイングランドにその典型を見ることができる「定住型植民地」と、南部の「プランテーション型植民地」に分類できるとして、ケラーやダン、グリーンとポールらの研究も参考に、両植民地類型の特質を明快に整理するとともに、それぞれの貿易構造の具体的な数値などを提示することで、かかる類型論が実態を反映したものであることを明らかにする。またスペイン植民地については上記の類型では捉え切れず、フィールドハウスの論を援用して、少数派の白人が多数派の先住民——本書では一貫して「原住民」の語が用いられているが、「先住民」と表記したい——を支配する「混合型植民地」であり、本国の社会構造を反映して

いたとする。そして先住民からの搾取・収奪によって作り出された「搾取型植民地」と位置づけ、これは先の「プランテーション型」と共通点を持つが、種々の特徴から両者は区別されると論じている。

第3章では、第1章・第6節のテーマをさらに深掘りする。すなわちタンネンバウムの新大陸奴隷制の類型の問題提起に始まる「新大陸奴隷制論争」を丹念にたどり、エルキンス、デービス、ミンツ、ジェノヴィーズらの見解を検討してゆく。法律・慣習・宗教など、イギリスとイベリア半島の文化・伝統の相違＝類型差に新大陸の奴隷制のあり方、ひいては人種差別の様相の相違を規定する決定的要因を求めたタンネンバウムに対して、同説を継承しつつ補強したエルキンスは、4つの法的基準から合衆国とラテンアメリカの奴隷制を比較する。その結果、ラテンアメリカではイベリア半島の奴隷制の伝統が継承された上、教会・国王・入植者の3者に一種の勢力均衡が生じ、奴隷の「道徳的人格」が承認されたため、「開放社会」が現出した。これとは対照的に、奴隷を「動産」と規定して「道徳的人格」を否定したアングロアメリカでは、より過酷な奴隷制のもとで奴隷たちは「閉鎖社会」におかれ、ナチスの強制収容所の人間類型にも対比しうる「サンボ類型」を析出したとする。かかる広義のタンネンバウム説に対して、南北アメリカにおける奴隷観が大差ないと論じたデービスなど、同説への批判も詳細に紹介し、さらに賛同・批判の双方に両面批判を加えたジェノヴィーズの議論を丹念に追う。著者はジェノヴィーズの奴隷制論は、タンネンバウム説をめぐる双方の「諸成果を批判的に摂取しながら、彼独自の論理と方法にもとづいて構築したもの」として高く評価し、さらに解明すべき問題点を2点指摘している。このような、いわゆる新大陸奴隷制論争は、わが国の学界でも広く知られているとはいえ、論争の細部にわたっ

て的確な検討を加えて明快な道筋を導出した本章は、当該分野における貴重な導きの星となろう。

第4章では、ターナーのフロンティア概念を世界史的規模に拡大して、西欧をメトロポリスとする「大フロンティア」を大航海時代以後のすべての新しい土地に設定したウェブの論を手掛かりに、南アメリカ、仏領カナダ、オーストラリア、ロシア、ラテンアメリカにおけるフロンティアの歴史的展開を比較史的に考察する。きわめてスケールの大きなパースペクティブを有する論考であり、その意味ではフロンティアのグローバル史とも言う。さらに著者によれば、かかるウェブの「大フロンティア」論は、フランクの従属理論の先駆としても注目に値する。また南北アメリカの比較史の視座からするならば、ヘネシーの論を引きつつ、合衆国のフロンティアが「原住民排除のフロンティア」となったのに対し、ラテンアメリカのそれは「原住民包摂のフロンティア」となったとする著者の類型化は、きわめて示唆に富む。

続く第2部は、スペイン植民地について詳細に論じる全4章が続く。まず第5章では、コルテスによるメキシコ征服前の中部メキシコ社会、すなわちアステカ王国の基礎組織であったカルプリ共同体の実相に迫る。初期の血縁制の強い共同体から次第に政治的・経済的組織に再編され、変質していった事実を指摘し、同共同体をアジア的共同体の一変種、またはアジア的共同体が解体しつつある過渡的形態であるとの仮説を提示する。必ずしも考古学的な最新の成果が反映されているわけではないものの、絵文書から割当地の復元をおこなったウィリアムズの研究も引かれており、主要な研究文献を渉猟し、説得的な像を描き出している。

第6章では、ラテンアメリカの土地制度を特徴づけているラティフンディオの成立過程について、前章で論じた「原住民共同体」の解体と

関連付けて解明した重厚な論考である。著者は数多くの研究文献を比較検討した結果、地域文化類型における高地地域（インド・アメリカ）に対応するアシエンダ型と、低地地域（アフロ・アメリカ）に対応するプランテーション型の2種類にラティフンディオを分類する。前者は「原住民共同体」の基盤の上に立ち、そこからの土地収奪によって「ペオン労働力」を創出して成立し、後者は「原住民共同体」の壊滅状態の中で「外から」黒人奴隷を輸入することで作られた。そして前者こそが、ラテンアメリカを特徴づけるラティフンディオであるとする。具体的な史実も豊富に提示され、実証に支えられた鮮やかな理論的整理といえよう。

つづく第7章は、前章で論じた先住民の集住政策について、その実行過程を具体的に検証する。スペイン植民地体制下で「原住民共同体」が被った変化が、様々な地域のミクロな事例、ケース・スタディから明らかにされ、先住民とスペイン人との相互関係・連関の中から先住民社会の変容と再編成が説得的に論じられる。前章・前々章の論理に沿いつつ、内容をさらに深化・展開させた章であり、第2部の構成が極めて体系だった構想の下に練り上げられていることがよくわかる論考である。

最後の第8章は、「都市の帝国」たるスペイン帝国にあって、「人工的」に「外側」から移植された植民都市に焦点を当てる。そもそも先住民の集住政策は、先住民村落の都市化を意味していたが、スペインの「征服者」たちが建設した都市は、「広大なアジア共同体的農村（「インディオ社会」）」に囲まれた「寄生都市」であり、「政治的支配と経済的搾取の拠点として半古代的南欧型都市」の性格を帯びていた。前章までの「原住民共同体」の変容から、さらに本章における都市の成立の分析によって、大きな議論の輪が閉じたことになろう。

以上、各章の内容について、若干のコメント

を挟みつつ簡潔に紹介してきた。総じて第1部は比較史、さらには関係史の視座を有し、北米を超えてアメリカ大陸全体、そして旧世界へと議論が展開し、文字通りグローバルな歴史を俯瞰するマクロな論考といえよう。そして、このマクロな枠組みを見失うことなく、スペイン領植民地に焦点を当ててその細部まで深掘りする第2部は、ミクロな議論ともいえよう。

とりわけ本書のタイトルにもあるごとく、比較史のアプローチは本書全体を貫く通奏低音であり、方法論上の最大の特色といえる。すなわち本書を一読することで、読者は比較史の手法がいかに有効であるか、その射程の深度を再認識させられることになるだろう。そもそも複数の地域の史的展開を同時に視野に収めざるを得ない比較史、とりわけ近世・近代史のそれを俎上に載せようとするならば、より古い時代と比して関係史料の数が膨大であるため、対象事象の研究状況を一望する際には、各研究者が用いた史料に再度、個別にアプローチするのは効率的とはいえず、むしろ公表された研究を渉猟し、総合的に知見を汲み出す方がスマートといえよう。これこそが、関連する数多くのモノグラフを一段高い視座から見通すメタ解析、もしくはシステムティック・レビューの手法に他ならない。本書が比較史への接近法として援用しているのもこの手法といってよく、当該の手法と比較史のアプローチにはとりわけ強い親和性があることが見て取れよう。またこのような謂いが許されるならば、奴隷制等の史的制度の比較を試みている本書は、ゲーム理論を援用しない比較歴史制度分析の書と言えるかもしれない。

ただし、望蜀とはいえ、やや気になる点もないわけではない。たとえば、比較史の方法論と不可分の関係にあり、本書で積極的に援用される「類型論」の枠組み・思惟方法について付言するならば、ここで析出された各類型は、むしろ原則として様々な史実から帰納的に導出され

たものと言いうるが、一方で、当該概念が一旦定式化されると——もしくはアприオリに設定されると——、むしろ演繹的に史実に適用される可能性も否定できず、その場合、図らずも複雑な史実に対して、いわゆる「プロクルステスの寝台」として機能してしまう恐れもなしとしない。また、表現の細部に関することながら、本書で多用される「原住民」の語は、今日の社会的コンテクストに照らすならば、やはり「先住民」とする方が望ましいのではなかろうか（180頁にあるように、たとえ原語との厳密な対応関係の結果だとしても）。さらに本書では1980年代以降の比較的新しい文献も積極的に参照されてはいるものの、全体として必ずしも最新と言いきくことは残念である。とりわけ4大陸（南北アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ）を視野に収め、近年、アメリカ史学界を席卷している大西洋史（アトランティック・ヒストリー）のアプローチに対する著者の見解を、ぜひとも聞きたかったところである。

とまれ、齢80余でこのような大部の書物を上梓された著者に深い敬意を表したい。思い起こせば評者が著者とお会いしたのは、コロンブス500年を機に企画された、あるシリーズ本の打ち合わせの場であった。若造の評者に親しく声をかけて下さったことを思い出す。それから四半世紀の時が過ぎた。「あとがき」で著者は本書を「墓石の代わり」と記しているが、わが国の未来像を論じるその口調は情熱に満ちている。著者の今後とも変わらぬご健筆をお祈りしたい。